

「乳幼児の保育・教育とは」 ～環境を通しての保育により子どもの主体性を育てる～

講師 白梅学園大学 名誉教授 無 藤 隆 先生



本日は、現場の保育に関わっていらっしゃる、保育という専門性を生かした方々に向けてお話ししたいと思います。乳幼児期の学びと呼んでいますけれども、保育としておそらく、順番に何をするというよりは、その都度の子供たちの出会いを大事にしながら、その出会いの中で適切に学びが生まれまたしばらくすると、それにつながるものが生まれてくる。そういうやり方をとっていると思います。そういうことを考えながら今日はお話ししたいと思います。

幼稚園教育要領や保育所保育指針などが数年前に改訂されました。ここではあまり深入りしませんが、簡単にいえば、資質・能力というものを一番基本においた上で、カリキュラムが成り立ち、そこに5領域の内容が具体的に含まれる。それは、プロセスとしてつまり子供の遊びを中心として進んでいくということです。その最初の部分は、当然、赤ちゃんですので、乳児保育というものがあります。で、次第に、年齢が上がってくると、資質・能力と5領域の内容を組み合わせながら、最終的には「幼児期の終わりまで育ってほしい姿」いわゆる10の姿になっていきます。このような布石をしてあるわけです。今のことを別な形で整理して、乳児の3つの視点、1・2歳と3・4・5歳の5領域というものの領域がはっきりするということと、幼児期の終わりまで育ってほしい姿というのが、3歳ぐらいから、徐々に徐々に広がっていき、それが小学校につながることを示しました。

その資質・能力というのは、もうご存じのとおり、知識及び技能の基礎、思考力・判断力・表現力等の基礎と、学びに向かう力・人間性等となっています。この三つの考え方の大事なことは、例えば、知識及び技能ですと、豊かな体験を通じて感じたり、気付いたり、分かったりできるようになったりする、とあります。感じるとか気付くとか、分かるとか、できるとか、そのようになっていくプロセ

スその途中経過であり、そこから理解へと向かう。知識というと、例えば、東京は日本の首都です、みたいなことを思うけれども、そうではなくて、そのもっと手前にあって、感じたり気付いたりすることを大事にする。感性・感覚から知的な気付き・知識へと最終的に発展する。で、思考力、判断力、表現力等の基礎もそうです。その気付いたことや、できるようになったことなどを使って、考えたり、工夫したり、表現したりするというような部分で、特に工夫する、表現するというと、幼児が積み木や何かで工夫して何か作ることを思い出します。そういう子供がやっているまさに遊び、そのプロセスにおいて、思考力というのは表れてくるんだ、それを伸ばそうとっているわけです。学びに向かう力というところも、心情、意欲、態度が育つ中でと説明しています。心情というのは、気持ちというか、嬉しかったり悲しかったり、びっくりしたり、面白く思ったり、そういう心情です。で、不思議に思ったり、面白く思ったり、憧れたりすると、何かについてやってみたくになりますが、それが意欲。やってみたくなれば、実際に何とかやり遂げようとする、それを態度と呼んでいるので、学びに向かう力というのは、そういうふう在意欲をもって自分の興味を持ったことを実現しようとしていくことを指しているわけです。

最近、そのことを、認知能力と非認知能力という言い方で説明する人が増えてきました。いろんな研究から、そういうことがいえるということです。認知能力というのは、知的な力ということですので、先ほどの三つの資質・能力でいえば、知識・技能や思考力のあたりを指しています。非認知能力というのは、意欲とか意思とか、自覚して見渡すこととか、人と協力することなどを指していて、それが、つまり学びに向かう力ということに対応するということになります。最近の研究では、それが乳幼児期によく育っていくのです。もちろん、そこで完成するわけではなくて、さらに磨くと大きい自信になり、それを通して大人になっていくわけですが、特に3・4・5歳あたりが、非常に重要な時期だということが分かってきました。この認知的な面・知的な面と、非認知的な面、学びに向かう力の両方が大事で、一つの活動、砂場遊びするとか、積み木遊びするというときには、必ずそこに認知面と非認知面の両方がある。つまり、意欲をもって取り組む、で、いろんなことを気付く、試行錯誤しながら工夫していくってところで、学びに向かう力や気付きという知識・技能や、工夫という思考力の芽生えが、出ているわけです。

その非認知能力の中心には、自分の気持ちや考えなどをコントロールする力が大事なのですが、特に非認知面の育ちというのは、具体的に例えば、こんなことです。部屋でも庭でも散歩でも、何にでも興味をもって関わろうとすること、やりたいことを思いついたら、積み木でも縄跳びでも、何度でも挑戦して、工夫してやり遂げようとする。ドッジボールなんかのルールを自覚して、結構ドッジボールって、ルールを変えていきます、話合いながら、新たなルールが一つ加わったら、新しいルールを守って遊ぶ。してはいけないやり方と、してよいやり方が分かるとか、よいやり方での工夫をするように切り替えられる。工夫するときに、友達と相談する。先のことを考え、目標を立てて、それに向けて回り道でも何とかやっていく。こういうところが非認知面ですけど、当然、ここには認知面、知的な面も関わる、ルールを自覚するというのは、正に知的な働きです。両方が関わりながら、伸びていくわけです。

そのあたりを、より具体的に、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿、10個ありますけれど、それで見たいというのを今日の講演のテーマといたしました。

まず、「健康な心と体」です。園生活の中で充実感をもって、自分のやりたいことに向かって、心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活を作り出すようになると書いてあります。これは、健康領域に対応して、しっかり運動できるようにしましょう、健康な生活習慣持てるようにしましょうとっています。注意してほしいのは、例えば充実感とか、やりたいことに向かう、見通しを持つとか、自らという部分です。だから、先生が全部仕切って毎日運動させるとか、健康な習慣を指示して身につけさせるということよりは、子供自身がやりたいと自ら思ってやろうと

しているとか、見通しというのは、それが何のためにやるのかが分かっていくということです。充実感というのはそれが楽しい、やりがいがあることで、嫌々やるのではなくて、そういう活動を通して、健康な心と体を育てていこうということです。そうすれば、幼児教育・保育の時期を過ぎても、自ら進んで運動を楽しんで、自分の健康な生活を維持していこうという気持ちが育つというわけです。

今のことは運動面と健康面の両方があるので、ほんとは全部取り上げる必要がありますけれども、ちょっと運動面で、その特徴を考えてみましょう。乳幼児期の運動というのは、その基礎となる体の動きについて、よく動くようにしていくことが必要なのです。簡単にいえば、いわゆるスポーツよりは、その手前にある体全体動かすことが大事になります。いわゆるスポーツというのは、通常、小学校半ばぐらい、3年生とかそのぐらいからが望ましいとされています。その前においては正規のサッカーというよりはサッカー遊びです。本格的なサッカーとは違います。それは、やはり幼児の身体の育ちを考えてということなんです。それを一言でいえば、協応性ということで、それは体のいろんな部位の関連がつくようにします。指と腕、腕と足、腰、それらの関節がうまく動くことが必要だということです。そうすると、そういう調整が育つという時期は、運動のどういうことが中心か。歩くことから、ちょっとスピードが出れば走るようになります。あるいは、ちょっと段差があれば飛び降りたり、飛び上がったります。要するに移動することと、それは全身運動ですし、その関係に応じた力が育ちます。そこでは、ただ平らな面を歩くだけではなくて、でこぼこした地面とか、何か障害物があって超えていくとか、回っていくとか、飛び降りるとか、そういうある意味柔軟な動きが育っていくわけです。要領・指針では、しなやかさということを書いていて、そういった、骨の強さとともに筋肉の柔軟性が重要です。特に柔軟性というのは、関節の動きなんですけれども、指とか手首とか足首、足の指、膝、肘などの、あるいは肩などの関節があります。それがうまく回るということが必要です。また、幼児期には全身運動が主なスポーツが望ましいのです。右あるいは左に偏ることは、できる限り避けます。体のバランスを崩すからです。右、左に偏りやすいスポーツというのは、例えば、野球、ゴルフなんです。それに対して、全身運動というのは、代表的なのは水泳、あるいは走ること、あるいはサッカーも、右で蹴るだけじゃなくて左でも蹴るとかする。サッカーは実は走るスポーツですから、比較的全身運動なんです。幼児に、ゴルフや野球を絶対やってはいけないということはないんですけれど、右で振ったら左でも振るということ、バランスを取るようにいたします。また、手や足の指先の動きを要する遊びも入れます。これは、運動遊びとあまり思わないかもしれませんが、手の指先を使う遊びというと、折り紙をすとかあやとりをすとかですが。手の指を柔軟にします。

それから、足の指を柔軟に動かすためには、時に裸足になって、ちゃんと踏みしめるとか、あるいは、指じゃんけんのような遊びがありますけど、そういうのやるといいでしょう。体の回転の動きというのは、マット運動や鉄棒などが主になります。逆上がりを上手にできるということよりは、鉄棒でぐるっと回る動きの感覚を知ることが必要だと思います。バランスを取ることや、体を振動させることや、滑ることは、雲梯とかブランコとか滑り台です。すごく長くできるとかを競うことではなくて、そういう感覚をどこかで知ることが必要だろうと思います。そういうような動きは実はいろんな遊びの中でできますし、庭があればいいんですけれど、なくても部屋の中で、あるいはどこかの公園でやれることはたくさんあるだろうと思います。

次に、「自立心」ですけれども、「自立心」というのは、自分で律してやっていこうということだから、幼児教育、保育の全体目標みたいなことです。ここでも、主体的に関わるとか、自覚してとか、考える工夫して、あきらめずにやり遂げるとか、そうすると自信を持って行動できる、というようなことが大事になります。まだうまくできないけど、自分なりにやろうとする、その動きを大事にしましょう、そこから自立心が育つんだということです。

自分はまだ完全に、もちろんできないんだけど、何とか自分でやろうとする。赤ちゃんでも、4歳でも5歳でも、自ら主体としてやろうとする気持ちがあるわけで、それを大事にしていきます。あ

るいは、周りでも、まだできないけどやれそうなことを年長のお子さんや大人がやっている。そこで、いつか自分もできるようになるな、したいなと思っていく。で、自分なりにやっていって、友達と一緒にやっていく中で、少しでもできることが埋まっていくと、自立ということが育っていくわけです。

ある保育園の給食では、食べるものを自分で取りに行き、それで、その自分なりに食べられる量を考えてもらって、食べています。実は、この園では、特に給食場面は異年齢のグループが作られていて、そのグループごとに給食をもらって、で、机に座って食べるのです。交代制で適宜いろんな時間で食べる。このようにして、子供たちの自主的な生活力を伸ばそうではないかと考えています。

次は、「協同性」。友達と関わる中で、お互いの気持ちを考える、共通のことに向けて、実現しようと考えたり、協力するということです。つまりここでいう協同性というのは、仲良くする、思いやり、さらに、一緒にこういうことしよう、となって、それに向けてそれぞれ分担をしたり協力したりして、一緒にことを成し遂げようとする、そういう意味での協同性なんです。こういう育ちを大事にする。もちろん、そのベースは、子供と子供が仲良くすることであるわけですが、そこから次第に、一緒にことをやろうということに変わっていくわけです。

その流れを説明すると、仲良し関係から協同する関係へとまとめられます。そばにいる、同じことをするところから始まります。ものをやり取りするとか、1歳、2歳ぐらいの小さいお子さんでも出てきます。そばにいると楽しい。こういうことをしようと言ひ出す。3歳ぐらいになってくると、こんなこと一緒にやろうとなってきますけどなかなかうまくいかない。で、対立したときに、じゃあどうしようかというふうに、案を提供していくとか、こういうことを一緒にやろうねとか提案する。

例えば、4歳児クラスで、仲良しの子供たちが、部屋をいろいろ区切りまして、その中で数名で各々遊んでいる。いろんな形で囲って、そこをおうちに見立てて、ごっこ遊びをしています。ベランダに衝立を置いてあって、二人で寝転んで、俺たちなあ、みたいなこと言っている。この二人の男の子なんかは、何かになってるつもりは、多分あると思うんですけど、この狭い空間で一緒にいる、こう仲良しを楽しんでるっていう感じでしょう。

年長児で、役割分担をして、実際にこういうことを作るとか、料理を作ったら当然食べさせるわけですけど、その食べる横に、実はそばに先生がいて、先生がご馳走されるんですけども、そういうストーリーがあるようなごっこ遊びになってきます。

次、「道徳性、規範意識の芽生え」というところです。「道徳性、規範意識の芽生え」というと、かたっ苦しい感じですが、友達と様々な体験を重ねながら、してよいことや悪いことが分かって自分の行動を切り替えたり、友達の気持ちに共感したりして、相手の立場に立って行動するようになる。また、決まりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いをつけながら、決まりを作ったり守ったりするようになる、とあります。この前半が「道徳性」に当たる部分です。幼児の道徳性ですから、そう難しいことでもないのです。していいこと、悪いことを分かっていくということと、友達の気持ちに共感する、つまり、思いやりをもって友達と関わっていきこうだとか、いじわるはしないようにしようとか、例えばそういうことをいっているわけです。あくまで、道徳性といっても芽生えです。ということで、「道徳性」というのは、小さい時から思いやりを育て、またそういうことを伝えていき、人としてやっていいこと悪いことを伝えていくのです。

後半が「規範意識」ですけど、「規範意識」というのはルールです。ルールをちゃんと守るということなんだけれど、ルールはルールとして分かって、自分としては、いや、そのルール従いにくいついていう場合もあるわけですので、気持ちの調整をするんです。あるいは、友達と考えがぶつかることもあるので、それも調整しなければいけない。「規範意識」というのはルールなので、ルールには身近な家庭、園でのルール、社会でのルールなどがあり、例えば、お散歩に行けば交通ルールがあります。あるいは、ごっこ遊びなどでも子どもが作ったルールがありますし、ドッジボールでもルールがあります。それは、そこで作ってるものです。ごっこ遊びのルールというのは、例えば、お母さ

ん役の子は、お母さんらしく振舞っていくという役割がありますが、それもルールと呼んでるわけです。そうすると、小さいうちはルールを守らずに、ルールを破っても楽しくというので、例えば、家庭でトランプか何かすると、3歳ぐらいの小さい子は、何が何でも勝たなきゃすまない、ルールを実は破っても勝ちってるわけですけど、5歳ぐらいになれば、トランプのババ抜きで負けて悔しいけど、じゃあもう一度やろうよって言って、頑張っって何とか勝とうとするというふうになります。そういうふうに、ルールを守りながら楽しんでいくということがある。場合によっては、ルールは変えられるんだという、この理解が非常に重要になります。

ルールの部分についての例ですが。だるまさん転んだという遊びです。だるまさん転んだでは、鬼が目をつぶって言います。その間は後ろの子は近づいていい。それで、だるまさん転んだって言い終わったら振り返って、そのときに動いている子がいたら、それは駄目です。振り返った瞬間に、後ろにいる大勢の子が体を止めなければいけない、そういうルールです。で、最後に近づいて、鬼をとらえれば、鬼の負けになる。この遊びはそういうルールを守ってこそ面白いわけです。これが振り返っても子供が勝手に動いていったら、つまらないわけです。あつという間につかまってしまいますから。こういうふうにして、みんなが楽しめる遊びになってますが、これは、その遊びのルールを守ってこそ面白いことなんです。このように、遊びというのは、実はルールが様々にあって、それを守るからこそ面白いということがよく分かるものだと思います。

5番目、「社会生活との関わり」というのがあります。これにはいろんなことが入り込んでおりますけれども、家族を大切にすること、それから、地域の身近な人と触れ合う。それから、幼稚園内外の様々な環境に関わって、情報を取り入れて活用する。さらに、公共の施設を大切に利用して、社会とのつながりを意識する。こういうことが入っていますが、要するに、家庭や地域社会、さらに外からくる情報ということで、その園の中で閉じるだけではなくて、外に出ていきましょう、外の関わりを作っていきましょうという中心のところ。保育園でも幼稚園でも、やはり園の中でしっかり保育するのは当然なんですけど、それだけだと、子供たちは園の中か、家にはいるので、園と家庭の様子は分かるんですけど、それ以外の町の様子、地域の様子が分からなくなってしまう。それでは困るのではないかということなのです。もう少し解説すれば、家庭での養育と、園での保育というのがつながり合うということと、地域にはいろんな人が住んでいる、大人の人、高齢者、障害のある人、外国系の人、小学生、中学生、高校生、また、商店街があれば、そこで働いてる人がいる、そういう様々な人とのお付き合いがあって、子供の世界、幼児の世界は、主には園と家庭なんだけれど、でも、地域にも人がいて、いろんな関わりができるんだということを知るようにしていきましょうということなんです。

情報については、コンピュータも、もちろんそうですけど、それ以外の図鑑とか、デジタル情報とかを整理するということをお大事にしたいということです。

次が、「思考力の芽生え」です。これは考える力とか、工夫する力ということです。ここには、ものの性質や仕組みをとらえるということがテーマなんです。それについて工夫する。友達といろいろな考えを出して、新しい考えを生み出しましょうということをやっています。ここでは、科学的思考の芽生えというところで整理してみたいと思います。科学的な思考とか、科学的な気付きといたりしますが、幼児でも、その始まりはあると思います。物事には、いろいろな面があって、すぐには変わらない特性と、変わる特性があります。一つ一つ、例えば、落ち葉は一枚一枚違いますけれども、イチヨウはイチヨウとしての形を持っています。あるいは、外側は内側の仕掛けで動いているはずで、それが一番分かるのはおもちゃ・遊具で、そういう仕掛けの中にもってるものがあります。そういうものを作ってはどうか。植物の栽培などでいえば、それに寄り添って、変容して見るのを見守るとかもできるといいでしょう。

例えば、ものの仕組みを工夫していく。ビー玉やどんぐりなどの転がしの通路みたいなものを作っ

てるところです。子供たちは、ピタゴラスイッチって言ってました。ともかく、転がすのですけど、単純に転がすんじゃなくて、相当複雑な転がり方をするように、段ボールやら何やらで通路を作っています。こういう仕組みづくりってのは、まさに科学というかエンジニアリングなんです。

それから、いろんな発見も生まれます。色水遊びをしていたんですが、いろんなペットボトルに色水入れています。よく晴れてる日で、庭でやってたんですけど、そのボトルを地面に置いていたんです。そして光が色水のボトルを通して、地面に影を映しますからその影に色がついてたんです。ピンクとかいろいろな色がついていました。それを見つけて、すごい、ほら、こういう色があるよとその子が興奮して言って、先生も、そう、すごいねと言って、白い紙を持ってきてあげて、ボトルの影側に置きます。きれいに色が紙に写って見えて



いるんです。さらに、その5歳の男の子ですけれども、折り紙ではどうなるのかなと試しています。折り紙で色がつかないかと思ったのでしょう。折り紙はさすがに厚いですから、黒い影になりましたけど。こういう影の面白さを見つけたところです。こういう科学につながるある種の発見が、いろんな場面に出てくるのです。砂場に雨どいで水を流すところでも、いろいろな苦心をして、流れ方の発見をしています。

さて、その次は「自然との関わり」で、これは、「生命尊重」ということとセットになっています。いわゆる自然ですが、生きてる自然や土や水などの自然への気付きとか、それを大事にしていこうという趣旨です。動物や植物との関係、土や水や風、光への触れ合いというのは、例え、庭が狭くても可能だろうと思います。で、動物、虫とか哺乳類とか、お世話するとか飼うとか、捕まえるとか、植物ですと、草花に、実や野菜と栽培も、小さい空間でできますし、それを使った草花遊びや色水遊びや。さらに、砂や水や、できればプールだけじゃなくて、池や川の体験みたいなことができるでしょう。難しくいえば、生態学的なつながりとしてというところに進みます。

例えば、どんぐりは木の実ですので、特定の木でなっ落ちていくものですが、どんぐりを、よく小学校でやりますけれども、水栽培として脱脂綿に水差して置いておくと、芽が出てきますけれども、そういうことをやると、どんぐりから芽生えがあって、どんぐりは種なんだということが分かることでしょう。そういう自然での循環を知ることも大事です。

さて、その次が「数量、図形、文字等への関心」です。遊びや生活の中で、数量、図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要に基づき、これらを活用し、興味や関心、感覚を持つようになるわけです。つまり、別に、幼児期に算数教育しようとか、文字のドリルをしようといってるわけではなくて、実際の子供の遊びや生活の中で、自然に数や文字を使う機会があるわけで、それを大事にしましょうという意味なんです。

文字を学ぶ機会というのは、環境の至るところにある。名前とか、歌の歌詞とかが壁にあり、しりとり遊びのようなものが、文字そのものではないけれど、その準備にもなることも知られています。数についても、実際に数えます。1、2、3、4、5、6、7、8、9、10と数えることに、既に、指とか口ですけれども、一つ加えるとか、一つ減らすという直感的な足し算、引き算、はじまりがあるということや、また、多い少ないという量と比較というのが始まるんだということをいっています。

例えば、すごろくなんですけれども、市販のものに紙を足して、それに書き込んで子供がつかないでい

るという様子です。かるたでは、文字が読める子どもは読んで、まだ読めない子どもはいるんですけど、読めない子なりに、絵で判断できて、分担して楽しむという様子です。数の例ですが、お芋を掘って、収穫の日ですけど、洗って干すんですが、どのお芋が大きいかという話題が出て、ばねばかりで量って、そうすると400、500、600、700代になって、結果的に、重さチャンピオンって書いてあるんですけども、一番大きいやつが決まります。長いのもあるよって言い出したので、巻き尺を持ってきて測って、長さチャンピオン。太いのもあるよって言い出す子もいたので、太さチャンピオン、これは紙テープを持ってきて、帯のように巻いて伸ばして測るんです。ということで、子供たちの知恵と、先生の助言を合わせながら、お芋の大きさというものを数量で示すという経験です。これは別に、算数をしてるわけではないのです。あくまで、子供にとっては、お芋掘りの一環なんですけど、でも、その中に算数経験が入るというところです。サツマイモを掘れば、大抵どれが大きいかなんて出る話だから、こう数量に結び付けていくこともできるわけです。あくまでサツマイモのことという遊びや生活の中で算数を体験し、その数量の感覚が育つところが重要なのです。

さて、「言葉による伝え合い」です。これは絵本や物語に親しむことを、自分の考えを話したり、人の話を聞いたりして伝え合うことを指しています。言葉の力というのは、特に四つの場面が大事です。周りの大人とのやり取り、特に大人が、子供が話す様子を聞いたり参加するやり取りです。それから、絵本の読み聞かせは、もちろん非常に大事な経験で、楽しいだけでなく、それまで知らない言葉や言い回しを絵本の筋の中で知ることができます。3番目は子供同士のやり取りを大人が支えて、言葉にしていくこと。4番目に言葉遊びをすることで、言葉を分析し、言葉について自覚的に扱うことが増えていきます。こういう種類の経験が言葉を増やし豊かにしていくのです。

例えば、自分たちがこんな遊びをしてこういう工夫をしたということをクラスの仲間の前で説明する。それをお互いに行う。その例ですが、グループがサークルになって、その前に出て、自分がこういうのを作ったんですというようなことで、真ん中の先生が時々助けてあげながら、なるほど、そうだねと司会している様子です。

さて、最後に「豊かな感性と表現」です。心を動かして、出来事などに触れ、感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の力などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだり、表現する喜びや味わい、意欲を持つようになるということです。表現というと、造形表現、音楽表現、身体表現といったものが主なところですが、ただ、音楽の手前には、音に触れ気付くということがあります。風の音、積み木の音などです。そこから少しずつ広がっていく。造形もまた、いわゆる絵にいく前に、殴り書きとか、色や形の面白さに気付くというところがあります。体の動きの表現もそういう小さい子どもの思わず行う動きから始まります。そういうところを大事にしながら、少しずつ育っていくのが表現という営みです。それは素材や対象や相手や場面に応じて多様に広がっていくのです。そう思うと、表現とは子どもの生活そして遊びの至る所に表れていくことが分かります。それをさらに豊かにしていこうというのです。

以上、10の姿について説明してきました。ということで、最初に専門性のある仕事としての保育ということを言いましたけれども、このように、0歳から5歳までの、いろいろな子供たちがいる中で、しかも、子供の育ちというのは、運動もあるし、表現もあるし、人間関係もある、いろいろな面があるので、それぞれに、どう育っていくかは難しいことです。ただ、そこによりよい遊び方は一律には決まりませんが、多様な中である程度の方向の広がりは見出されるでしょう。それを先生が指示して、やらせればいいのかではなくて、子供の発見をうまく促す、支える、導くことが必要になります。そのような間接的な支えがあることで、子どもは自らそして活動のさまざまなところで力を発揮して、さらにその活動を広げていくことでしょう。さらにいえば、そのようなことが可能になるような環境を、うまく用意してあげる必要もある。そして、子供の様子を見取りながら、子供がうまいこと見つけたら、それを他の子にも広げてあげるようなやり方を導入します。

こういったことは非常に高度で専門的な仕事ですが、同時に、子供の様子を、先生方が楽しんで見ていけば、子供のしている面白いことは幾らでもあるので、それを活かす、広げていくという意味で、保育というのは楽しい仕事でもあるのではないのでしょうか。皆さん方一人一人の保育の現場でその進め方を見直すために、今日の話が少しでもヒントになればありがたいと思います。

